

【特別講演1】 第9席

『黄帝内経』の思想的背景

京都 武田 時昌

『黄帝内経』は、周知のこととして中国医学の基礎理論書であるとされる。それに異論を差し挟む余地はない。しかし、内容的な難解さにおいて、中国の典籍のなかで五指にいる、と私は思う。そこに展開されている理論は、きわめて複雑な構造体を形成している。初学者がいきなりこんな難しい書物を手渡されたら、ノイローゼになりかねない。

医学理論の概括的な枠組みを伝達する役割は、『難経』『傷寒論』『脈経』などのもう少し後に著された医学書が担った。それらは、『黄帝内経』と好対称に、定式化した体系が明瞭に示されている。『黄帝内経』は、多様な解釈がなされるパラダイム源としてのバイブルであり、むしろ最終到達点であった。つまり、『黄帝内経』から東洋医学が離陸したのであるが、その発展段階は、段階的、直線的なものではなく、いくつもの回帰曲線を描いているのである。

近年、馬王堆漢墓、張家山漢墓から出土した医書などによって、内経医学との連続性が確認でき、中国医学の黎明期が多少なりとも明らかになってきた。一方、不連続面として、灸療法であって刺鍼療法ではなかったということ、さらに経脈が五蔵との結合を想定しておらず、陰陽五行説による理論化が未発達であったことなどが指摘でき、『黄帝内経』によって技術操作的なレベルから高度な理論へと昇華したことを明示するものであった。

言い方を換えれば、豊かな思想性を内包する『黄帝内経』の編纂は、漢代における特異な事件であった。大事件が生起するからには、必ずや思想的な背景があるにちがいない。画一的でない理論構造が生み出されたのは、思想や文化との有機的な関連づけがさまざまに試みられたからである。

そこで、本演題では、内経医学と漢代思想の関連性について、いくつかの具体的な事例を検証し、その事件の真相に迫りたい。

自然と人倫の関係のなかで人体の現象を法則化しようとする理念は、近代医学の世界では忘れ去られようとしている。『黄帝内経』の解説という営為において、読者が今日的な意義を見いだそうとするならば、古代人の「文化意識」に大いに学ぶべきものがあるだろう。